

最優秀賞

大切な手紙

大阪府 賢明学院小学校五年 秋山 未野里

「なんとか無事に終わった」。ホールから教室にもどるとホッとした気持ちになった。この日は延期になった二分の一人式があった日だ。この日のために、アルバムを作り、両親の前で発表する決意表明を練習した。本番、両親の前で発表する時、正直、緊張した。私はピアノやバレエの発表会でも、参観でも、あまり緊張しないのに。二分の一人式は私の中で特別だったと実感した。「ちゃんと伝わったかな」と思いながら、席について、式の事をふり返っていた。

しばらくすると、ホームルームが始まり、先生が、「あなた達のお父さん、お母さんから、お手紙を預かっています。」

と言った。私もクラスのみんなも、すごくびっくりしてざわついた。今日の朝、手紙があるなんて、お父さんもお母さんも、言っていないかった。大体、い

つ書いていたのだろう。先生に、いつわたしたのだろう。分からないことだらけだった。先生は、一人ずつ名前を呼んで白い封とうをわたしていた。「やっぱり白い封とうは、見覚えがない」と思いながら、受けとっていく友達をながめていた。

私の名前も呼ばれ、先生から封とうを受けとった。そこには「未野里ちゃんへ」と書かれ、かわいいシールがはってあった。お母さんの字と気付き、ドキドキとワクワクが入り混ざり、なかなか開封することが出来なかった。深呼吸をして、クローバーのシールでとめられている封とうを、ていねいに開け、手紙を読んでいた。手紙の一枚目には、赤ちゃんの時からのエピソードが色々、書いてあった。入園前に幼稚園の体験に行ったら私は楽しくて、帰らなかったと両親を困らせた事が書かれていて、笑った。二枚目には、私への思いがたくさんつづられていた。

「ママやパパは、どんな時も未野里ちゃんの一番の味方です」という言葉が目に残り、ジーンときてしまった。じわじわと気持ちが高まり、読み進めると、「未野里ちゃんは、自まんの娘で、大切な宝です」と書いてあり、とうとう涙がこぼれてしまった。

私は読み終えた時、お父さん、お母さんに今すぐ会って、だきしめてもらいたい気持ちになった。お母さんは、しかった時はこわいけれど、私が困った時は相談のつてくれ、頼れるお母さん。お父さんは普段、いそがしいけれど、勉強を教えてください、一緒に遊んでくれたりするやさしいお父さん。私は、すごく大切にされてたんだと気付いた。

「お父さん、お母さん大好き。いつもありがとう。私はこの日の気持ちを胸にきざみ、これから元気の前に進んでいくね。」

